

館山支部だより Vol.114

<支部連絡窓口>
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
Tel. 0470-22-0230



日本固有の品種 寒椿

<1月中旬社宅の庭先にて>

立春も間近かですが、改めて新春のお慶びを申し上げます。4年目に入るコロナ禍や長期化の様相を呈するウクライナ情勢など、国内外ともに暗いニュースが続いておりますが、今年こそ状況の好転とともに希望溢れる年になりますようひたすら祈るのみです。

会員・ご家族の皆様のご健康とご多幸を祈念申し上げます。

<支部長>

支部の活動概要

《12・1月活動実績》

- 1月初 21空群司令への年始表敬挨拶
(コロナ禍に鑑み電話によるご挨拶になりました)
なお昨年12月23日付群司令の交代があり、前群司令は2空群司令に転出され、新群司令に行松栄治1佐が就任されております
- 1.28(土) 1月支部役員会(コミセン)

《2・3月活動予定》

- 2.27(月) 県隊友会部隊研修(陸自木更津駐屯地)
- 3.11(土) 県隊友会後期理事役支部長会議(千葉市民会館)
- 3.21(火) 館山市戦没者合同慰霊祭(鶴ヶ谷八幡宮)
- 3.25(土) 年度末支部役員会(コミセン)

千葉県隊友会部隊研修(木更津駐屯地)について

令和4年度県隊友会の部隊研修が次のように計画されております。

- 1. 期日; 2023. 2. 27(月) 13:00~15:30
- 2. 研修先; 陸自自衛隊木更津駐屯地
- 3. 研修内容; オズプレイV-22他配備航空機見学等
- 4. 申込期限; 支部事務局へ2月10日(金)まで

※当日所定の時間までに木更津駐屯地正門前集合、交通便は私有車両または公共交通機関等

細部については支部事務局へ⇒ <支部事務局 Tel.22-0230 メール g_marine@f5.dion.ne.jp 川村>

レクイエム

12/3 安部吉博会員ご逝去(海、享年73歳)

隊友会会員として長年のご理解ご協力有難うございました。謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈り致します。 <会員一同>

令和5年度年会費等の納入について

県隊友会の会務運営に不可欠の資金源としての会費等(年会費または会運営協力費)納入の時期になりました。同封の振込用紙で3月末までの納入についてご協力をお願い致します。

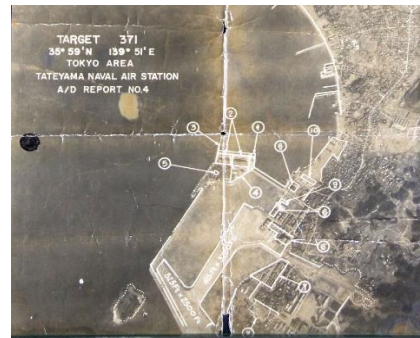
<支部事務局>

第21航空群だより 対潜ヘリSH-60Kの除籍始る



除籍第1号機に花束を
第21航空隊所属8405号機
<海自公式ツイッターより>

2005(H17)年から部隊配備、運用が開始されたSH-60K型対潜ヘリコプターの除籍が始まりました。警戒監視行動はじめ捜索救難、搭乗員の訓練等、18年間にわたり海自の主力回転翼機として活躍してきましたが、この度任務を終えた第1号機の除籍セレモニーが行なわれました。お役目ご苦労様でした <川村 記>



<戦争末期、米軍機に撮影された館山海軍航空基地>
(館山市立博物館所蔵)

戦時中サイパン在住の一邦人が、終戦後米軍のアスリート基地(サイパン島)の格納庫で偶然拾得したものを秘かに持帰り、64年後(H22年)に館山市に寄贈したものである。以上は屏日紙に紹介されたものであるが、記事では、この邦人は仕事の関係で戦争が始まる前に貨物船で館山を出港してサイパンに向かったということ、拾得した写真の「TATEYAMA NAVAL AIR STATION」の印字が監裏から離れなかったであろう。 <筆者注>

雑感「大河ドラマに“鎌倉史”のロマンを求めて」

昨年放映されたNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」は、高3で使った参考書を傍らに勉強?しながら観たこともあり、ドラマの理解とともに改めて鎌倉時代を再認識できたと自己満足しております。この参考書というのは、受験の土壇場になって買い求めた小冊子「日本史ダイジェスト版」で、余白にびっしりと埋めた手書きメモとともに私製日本史? “虎の巻”として捨て難く、今日まで書棚の片隅でほこりを被っていたものでした。

私が鎌倉に執着するのは、幼児の頃、鎌倉の近くに住んでいたことが関係していると思っています。戦争が始まり、小学校に入るまでの2年近く、亡父の仕事の関係で移住することになったのですが、記憶では鶴沼(くげぬま)とか言う町で、家の近くには片瀬川や海水浴場、少し離れて江の島、稲村ヶ崎等々の地名が頭の中にあります。

鎌倉と藤沢を結ぶ通称“江ノ電”は、10キロ足らずの運行区間に15の駅が密接し、路面電車並みの速度で住宅街を急カーブですり抜け民家に手が届きそうな情景など、テレビドラマなどですっかりお馴染みになっています。夏場に運行される無蓋貨車にテント屋根を張ったような風流な納涼電車は、子供たちの夢を掻き立ててくれるものでした。日曜の夕方など父親に連れられこの電車ですぐ隣の江ノ島へ赴き、長い木造の橋を渡って島の土産物店で綿アメをねだったりした記憶が妙に脳裏に焼き付いております。

幼時の記憶の中の鎌倉は、断片的で情緒的、幻想的なものばかりで、歴史とはおおよそかけ離れていますが、すぐ近くの江の島がかつて頼朝が藤原氏との戦いに臨むに際して戦勝を祈願した地であり、これに端を発して弁財天(神社)が誘致され、爾来、鎌倉幕府の宗教的な象徴として代々領主が参詣し、さらには室町・江戸幕府の歴代将軍にも引き継がれています。そして江戸時代になると庶民の信仰の地として、江戸だけではなく全国各地から参詣者が後を断たなかったと言われております。

また住まいの近くを流れる片瀬川の河原は、かつて執権義時と3代将軍実朝の暗殺を企てたクーデター計画の発覚に端を発した内戦の末に、敗れた首謀者の和田一族が処刑され晒された場であり、激戦場になった和田塚(江ノ電の駅)一帯は、多数の人骨が発掘(昭和期の工事中)されるなどごく一例ですが、三方を低い山で囲まれ海に面する防備上要害の地と言われたこの狭い鎌倉には、幕府の館跡や神社仏閣、古戦場等々、数々の旧跡がひしめき合っているのです。

大河ドラマに限らず、限られた映像・セリフだけではよく理解できないことが多いのです。鎌倉幕府に関することは、鎌倉時代に幕府の手で編纂された歴史書「吾妻鑑」が根拠になっていると言われておりますが、記述内容等について歴史学者の間では異論異説があるようです。ますます進む脳の劣化を少しでも抑えるため、この「吾妻鑑」を紐解いて鎌倉時代を探究してみようという野心に駆られています。歴史の真実・真相を究めることは、“歴史のロマンを追求する”ことにも結び付くと思っています。

南房総では「里見史」を大河ドラマへという要望、署名運動が熱心に続けられているようですが、今後、里見史が候補に挙がる可能性はあるのでしょうか? 歴史の奥深さと言いますか、武家政治の発祥とともに室町、江戸時代まで続いた武家政権という日本史の中での位置付け、史的意義を考えた場合、悲観的にならざるを得ないのです。 <匿名希望、海>

旧軍文書・記録資料の欠落と史実の探究について

戦時中の館山航空基地、館山航空隊の公文書・記録資料はなぜか“極めて”少ない。皆無と言っても良い。終戦時(愚直なまでに忠実に?)焼却処分されたのであろうか。必然的に館山基地に関することは、根拠に乏しい想像、憶測が多く、史実・真相が究められていないことは残念である。当該事案に関する文書・記録資料が無い場合の対応策について、2~3の事例を挙げて解説することにする。

事例1

掲載した写真は、印字の「TATEYAMA NAVAL AIR STATION」から館山海軍航空基地であることは一目瞭然であるが、写真が「いつ、何の目的で撮影され、何に使われたのか」等については皆自分からない。ところが写真裏のボールペン書きの「Feb. 14, 1945 AT SAIPAN」のメモが、解明の有力なヒントになった。

- 「昭和20年2月14日」、この時期の館山に関係する空襲の記録(※)を探索したところ次のことが確認できた。(※防研保管資料)
- ①S20. 2. 10、館山基地上空にB-29が単機で現れ、数発の爆弾を投下して去っていった。当時、館山基地の防空を担っていた252空戦闘飛行隊館山派遣隊の戦時日誌には、「14:45、B-29 1機 館山基地に来襲、投弾」と記録されている。
- ②この1週間後の2月16、17日、2日間にわたって 館山基地は米機動部隊の艦載機4~15機編隊16波、延べ120機による反復空襲を受けている。この時の状況は、当時、館山基地に駐留していた903空司令部の「戦闘詳報」に克明に記録されている。公式記録によれば、これは硫黄島攻略の前哨戦として行われた関東各地の陸海軍航空基地に対する艦載機延べ千数百機による反復空襲であった。(攻撃の主目的は、日本軍機による反撃を防ぐため駐機中の戦闘機を撃破することであったと言われる)この①、②の事象(出来事)と写真のメモ書きを対比させた場合、次のような推測ができよう。
- 2月10日に館山基地に来襲したB-29×1機は、「偵察・写真撮影」が目的であり、爆弾投下は“残弾処理”に過ぎなかったのである。公式記録によれば、2月10日にB-29(100機編隊)が群馬方面を空襲している。終わって編隊を解き、あらかじめ指定された関東各地の陸海軍飛行場の偵察・写真撮影を行ってサイパンに帰投したであろうことは容易に推測できる。
- 撮影した写真はサイパン島司令部で現像、解析の上、2月14日に機動部隊空母各艦・飛行隊の作戦担当士官等を招集し、ブリーフィングとともに攻撃対象基地の写真をそれぞれに配付した。「2月14日 AT SAIPAN」がその時のメモであることは疑い余地もない。なお機動部隊はすでに硫黄島に向けて行動中であり、ブリーフィングを終えた作戦担当士官等は当然ながら航空機で機動部隊に追いつき帰着したであろうことは言うまでもない。
- 以上が、①②の事象(出来事)と写真・裏面のメモ書きとの対比から推測したものであるが、「断定」と見ても良いであろう。
- ③この空襲の2日後(2月19日)朝、硫黄島に米海兵師団の上陸が開始され、日本軍守備隊と40日間にわたる凄惨な戦闘が繰り広げられた。事例2については紙面の都合上次号に掲載。 <自称地域史探索マニア その38>